

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	石井良和教授送別の辞
別タイトル	Farewell Professor Yoshikazu Ishii
作成者（著者）	舘田,一博
公開者	東邦大学医学会
発行日	2024.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 71(1). p.8 8.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	退任記念
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023 052
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD24021772

石井良和教授送別の辞

舘田 一博

東邦大学医学部微生物・感染症学講座

石井良和先生に最初にお会いしたのは、1986年だったと思います。私が長崎大学医学部臨床検査医学（山口恵三講師）の大学院に入学したとき、石井先生は薬剤部に所属しながら検査部で実験をされておりました。大学院の1年目で何もわからない中、石井先生からマイクロヨド法によるβラクタマーゼ活性の測定法をご教示いただいたことが懐かしく思い出されます。あの当時、石井先生は朝6時前には研究室を訪れ研究の準備を行い、薬剤部の業務が終わったのち夕方から夜中にかけて実験を行っていました。石井先生は心底の研究好きで、どんな労力も厭わず研究に没頭する姿勢に多くのことを学ばせていただきました。その後、1990年に山口恵三先生が東邦大学に教授として異動、半年遅れて私も本学でお世話になることになりました。その2年後だったでしょうか、石井先生は薬剤部から歯学部の教員となられておりました。ただ、研究状況に関しては満足していないようで、東邦大学への異動に関して相談したことを覚えています。東京へ移動の決断は、石井先生にとって大きな分岐点であったように思います。東邦大学に移籍後は、薬剤耐性メカニズムの研究を次々に、かつ着実に積み重ねていかれました。その象徴的な研究成果は、本邦で初めての基質特異性拡張型βラクタマーゼのクローニングとして1995年にAntimicrobial Agents and Chemotherapy誌に“Toho-1”として報告されました。その後の業績はご承知の通りで、日本の抗菌薬耐性メカニズム研究のトップリーダーとして活躍を続けています。2011年に山口恵三

先生から教室を引き継がせていただきましたが、石井先生の能力をさらに発揮していただくために、翌2013年より微生物・感染症学講座を感染病態解析分野と感染制御学分野の2分野制とさせていただきます。

βラクタマーゼに関する研究は石井先生のライフワークであり、2022年の東日本感染症・化学療法学会合同学会（札幌）の特別講演で「Bla, Bla, Bla Bla…」というタイトルで発表されました。βラクタマーゼにかけた研究人生の集大成の発表であったように思います。石井先生は1999年から2000年までベルギーのリージュ大学理学部タンパク質工学センターに留学し、世界のトップレベルの技術を学んでおります。また米国、欧州、オーストラリア、シンガポール、中国、台湾、韓国などの耐性菌研究者と幅広い研究ネットワークを築いてこられました。βラクタマーゼが繋いだ人脈を通して、多くの若い研究者が国際交流のチャンスをいただいたものと思います。こうやって思い返してみると、私は石井先生と35年を超える時間を共有していたことに気づかされます。20代・30代の頃は、それぞれ何時間にもわたって研究のことを熱く語りながら、お酒を飲んでいたことが思い出されます。退任という1つの区切りを迎えますが、“一生一研究者”を貫く石井先生の思いと覚悟が、次の世代にしっかりと引き継がれて行くものと確信しています。長年にわたりご指導いただき有難うございました。